

Young Children

the Journal of the Association
for the Education of young children

Vol. 24 No. 6 1969—9

本号の掲載論文は、①低所得家庭の子どものための就学前教育 (Head Start) に関するもの、②言語学習に関するもの、③子どもが主体的に展開した遊びの逸話的報告に大別される。

就学前教育が普及し、改良されていくに従って、子どもたちはどのくらい自由遊びをしたがっているか、学習への動機づけは友だちの中から起こるのだろうか、組織化された学習活動は子どもたちを退屈させるだろうか、作業を続けさせるために教師たちはただほめていけばよいのであろうか、という疑問が増大してきているが、リリアン・G・カツはこの点に着目して、「Head Start 学級の子どもと教師」について、伝統的アプローチ (子どもは、教師に暖かく受け入れられること、自発的な遊びなどを重視する立場) と実験的アプローチ (教師が子どもの活動を計画し社会的学習理論に則って、賞讃、承認、物質の報酬等によって、計画の遂行を強化し教育効果を高め

ようとする立場) の比較検討を行なっている。両群の教師の行動観察、子どもの行動観察の結果から (「実験的」クラスはつくられていなかったため、当初の比較検討の意図は達せられなかったが) 就学前教育の研究において、方法やアプローチの違いよりも教師のタイプの違いが大きな意義をもつことが示された。ここでカツは、教師の行動に関する研究あるいは教師と子どものタイプの最も有効な関連についての研究が今後に期待される課題であることを指摘している。さらにこの実験の発想に、ハントの「マッチ (match)」の概念を引用しており、子どもが十分に豊かな環境で、自分の興味を維持するためには、新しい情報を得ることが必要であり、それを楽しみ学ぼうとする欲求も共に強められ増大すること、換言するならば、外から報酬を与えられたり強化されるばかりでなく自分自身の内部で、情報過程や探索欲求が報酬をうけ満たされていることが必要であること

を説いている。ベルナイス・S・シュエル
ドンは「アラスカでの Head Start」のタ
イトルで、一九六七―一九六八年の実態
を、とくに基金が打ちきられてからの運
営に焦点をあてて報告している。

また、乳児の家庭教育についてジョー
ン・ロスティブナウらは「乳児の教育―
ある生活共同体の企画―」を報告して
いる。この企画は、ごく幼い時期に知的
な環境に置かれることは、その子の後の
学習能力に影響を与えるとの前提で、一
九六〇年にメリーランド州のモントゴメ
リーとプリンスジョージ地方ではじめ
られたものであり、黒人街に住む親子の
教育上のハンディキャップをなくすこと
を目的に、より豊かな階層（白人）の婦
人がボランティアの家庭教師として在宅
指導に当たった。このような教育の基礎と
されるのは、家庭教師が訪問して指導す
る際における子どもと家庭教師の受容的
態度であるが、子どもは時として両親の
感情を汲みとりやすく、両親が家庭教師

を快く思っていないと、受容的関係は成
立しにくい。それ故この企てがうまくい
くためには、子どもと家庭教師だけが別
の部屋で勉強するのではなく、両親もき
ょうだいの友だちも共にそこにいてその
子と家庭教師がしていることについて理
解してもらうのがよく、そうすることに
よって、母親はこの運動に関心を寄せる
ようになり、現在では彼女たち自身も訓
練を受けて実際に家庭教師として活動す
るに至っていることを報告している。

言語学習に関しては、この乳児の家庭
教育が、ことばの発達を主要目的として
いる他に、ケルビン・ロシーファートの
「二つの就学前プログラムにおける言語
表現的相互作用の比較」と、セリア・アラ
パテリーの「言語学習への接近」があ
る。前者は、就学前教育のあり方に、①
組織立てないでその場に依じてやってい
く方法と、②きちんと計画されたたとおり
に行なう方法があることを指摘し、双方
が教師と子どもとの間の言語表現的な相

互関係にどのような差異を生じさせる
か、について仮説検証を行なっている。

また、方法①は時間、空間、関係、連
続、分類などの概念に焦点をあてている
ことから、これを「認識的プログラム」
とし、方法②は遊びや歌よりも標準語の
文法型を用い、数を数え、声を出して読
めるようになることに目標がおかれ、授
業は教師の質問に答えることによって急
速に進められることから、これは「言語
的プログラム」と区別された。

両群は六回の二〇〜三〇分間にわたる
集団（五〜十五名）討議での言語関係を
オスカー（OSCAR）の分類基準に従って
記録され、結果が検定されたが、オスカ
ー基準をこの実験に引用することの信頼
性についての研究がまだなされていない
ことが判明した。もっと綿密な実験であ
ったら差異が得られたかもしれないが、
彼はこの結果をスタンフォード・ビネー
の得点変化と比較して、認識的プログラ
ムと言語的プログラムの差異よりも、む

しろ就学前教育を受けたか受けないかということの影響の方が大きい、と見なしたほうがよきそうであると述べている。

後者は、言語発達と言語学習の研究に付随する様々な問題についての論評である。著者のラバテリーは基本的には「言語学習の能力は人間に非常に深く根ざしたもののなので、たとえ劇的なハンディキヤップに直面しても、子どもは言語を学習していく」との姿勢で、社会経済的に不利な背景を負っている子どもの研究について述べている。たとえば、「foosies」というべきものを、「foosies」と言うとしても、「その誤りは彼らが複数形を作る規則の一つについての知識をすでに獲得していることを示している。彼はすべての場合についてまだ知っていないにすぎない」また、言語は学校教育の媒介物であると思えずと、不足している分がハンディキヤップとして考えられるが、「美しい」に相当する同義語を五つ知らなくても「He done it」と言っても何ら学校での

学習の妨げにはならない。むしろもっと妨げになることは、(次第に確信されつつあるのだが)学校が要求することに出会って、社会経済的に不利な立場の子どもは言語を使用する能力に欠けていると思ひ込むことである。つまり彼は認識的な要求に出会って、言語をどのように用いるか知らないだけなのに。シカゴ大学早期教育研究センターでのヘストとシップマン(1968)の研究等を引用して、この主張に根拠を与えている。

ラバテリーはさらに、言語と論理的思考は「相互に関連しあっている」というヴィゴツキーの主張を前提に、原因結果の論理的思考の発達と言語の発達に関してはピアジェの最近(1967)の研究を引用し、おとなのまねをする(Patterned Play)ことによって幼稚園でのリズムやお答えの学習よりもずっと効果的に、言語と思考の過程が影響を受けることをペレイターとエンゲルマンの(1967)報告から明らかにしている。また、言語遊び

が論理的能力の発達を培うこと、言語遊びが言語訓練の意味をもつ場合等について述べ、最後に否定の概念の発達に関する研究を紹介している。

第三の分類の報告には、ラザー・W・フラガーとジェシー・M・ゾラの「子どもたちによって計画された部屋」とウィリアム・タイラーの「タイヤ遊び」がある。我々は「子ども中心」の考えに則って出発するけれども、一体「子ども中心」とはどういうことであろうか。この問いかけを部屋の整頓の問題に結びつけて、子どもが自分たちの部屋の構成に参加したことが、子どもたちにどのような変化をもたらしたかについて記述したものが前者であり、後者は自動車のタイヤの内部の柔らかいゴム管が、興味深くこのない遊具であるばかりでなく、肢体不自由児にとっては、適用範囲が極めて多岐な療育器具(筋肉運動の訓練が遊びを通して可能)としての価値をもつことを楽しく報告している。(鮎田典子)